藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

「続・バンホーテン」など

先日、巡礼記を通じて長年付き合いのある友人の訪問も受け、久しぶりにゆっくり話ができた。

ある日、義父に電話すると、「今日は、一日中誰とも話をしなかった」と言ったことがあった。愕然としたが、それが今では私のこととなっている。

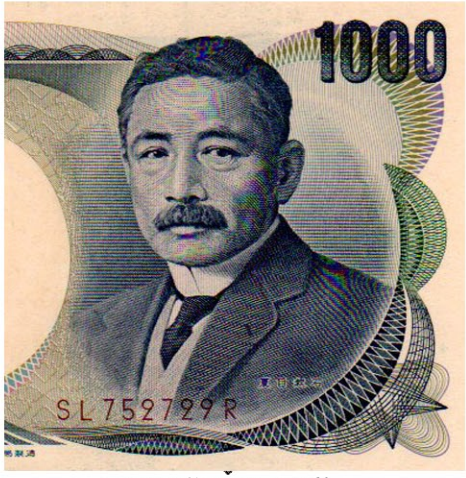
友人は巡礼記の６８６号を読んで、自分が古い千円札を持っていたことを思い出した。机の奥から、千円札は見つかった。「２枚あったので１枚差し上げます」と持って来てくれたのだ。うれしかった。ついでにバンホーテンのココアの話になり、ひと手間かけるだけで、こんなにおいしくなるとはと喜ばれた。

モンブランの万年筆

私たちの世代は舶来（はくらい）品が珍しかった時代で、バンホーテンのココアというと「シャレたものを飲んでるんだね」と言われ、ちょっぴり得意な気分になったものだ。

今では舶来品という言葉も死語になりつつあり、若い人にはなじみがないかも知れない。大学生になると、モンブランの万年筆をお祝いにプレゼントされて得意がっている友人もいた。

カルピスが初恋の味なら、バンホーテンのココアは熟年世代の恋かなという話になり、大いに盛り上がった。濃い甘さとシャレたチョコレートのほろ苦さに牛乳のまろやかさが加わり、絶品だなと。



夏目漱石の千円札

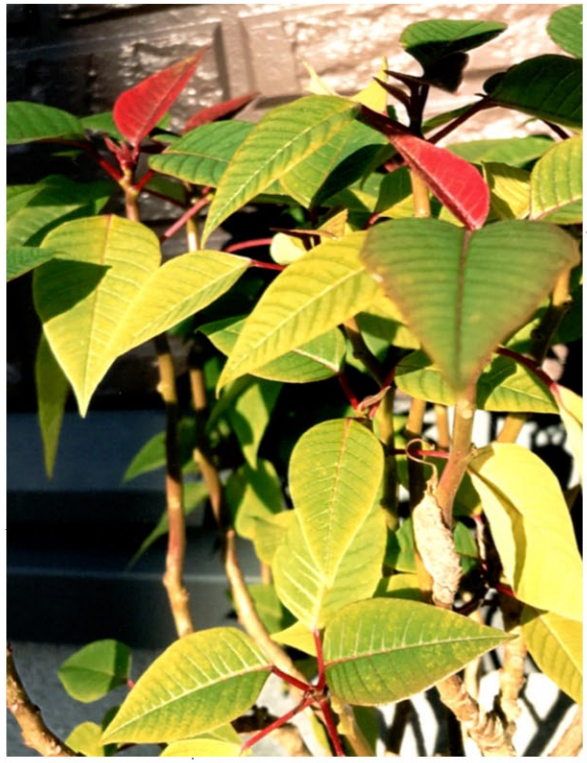
側の奥方どもが１トーン上げて、「私たちみたいな？」と言っている。殿方は「ん？？えっっっ？まさかァ」と苦笑い。

師走の寒い夜、ホットココアを飲んで、大笑い。バカげていても、楽しい語らい。この世の中で、つらいコロナ禍の中で珍しい喜びと笑い。時々、人々の顔は、笑いや喜びを表現するために作られたような気がしてくる。

名探偵、ポアロは灰色の脳細胞と言う言葉で衰えていく知性を表現していたが、私はさびた脳細胞とガタのきた骨格に最後の注油をしながらもうひとふんばりとハッパをかけ、日々を送っている。

一方、庭に目をやると木々や植物は枯れ始め、土の中で来たるべき春の準備を始めている。毎時間、毎分成長し変化している。自然の世界は、毎日が新しい。新しい日の出を感じ一歩ずつ近づいて来る春を期待して土の中で過ごす。

去年、真紅のポインセチアを買い求め、あまりの美しさにみとれ庭の隅に植えた。枯れずに夏は青々とした葉が茂ったが、冬になっても葉は真紅にはならず、黄緑と少しの緑のポインセチアになった。申し訳なさそうに２枚だけ葉が赤くなった。


青いポインセチア